

## 表現指導の戦略

——いかに表現させるか——

### 一 なぜいま戦略か

中学と高校の国語教育では、一斉授業がいまもなお主流を占めている。教材を読んで、説明して、分かせて、その結果を暗記させるという方式から、なかなか脱却することができない。このような形態の授業において、生徒たちは教師の説明を聞き、板書事項をノートに写し、試験に出題されるからという理由で、チェックペンを駆使しながらその内容を暗記する。主体的な興味からではない。上級の学校への進学という実利的な目標のために、彼らはひたすら耐えているかのようだ。そしてその忍耐が限界に達したとき、彼らは「キレる子ども」と化す。つまらない授業を聞こうとはしない。教師がたしなめると、反抗するかもしれない無視する。不登校や中途退学になる生徒も出る。

そもそも一クラス四〇人もの生徒たち全員に同じレベルの学習

町 田 守 弘

を展開するという形態は、いまの子どものたちの現実と対応できるものではない。学校でもこの問題に無関心でいられるはずはなく、様々な方法で新しい試みが入り入れらつつある。グループ学習やTT（ティームティーチング）の導入、教育機器の活用などは、その具体的な例である。ただし国語科の授業において、一斉授業という伝統的な形態の抱える問題を克服し、新たな可能性を開くことは至難の業というところになる。一斉授業による読み中心の授業は、国語教育の歴史の中に深く根付いた制度と見ることができ。せめて表現の領域では、伝統的な形態を超えた指導の在り方を模索したいものである。

一斉授業の基盤には、「文化の伝達」という学校教育の大きな目標がある。これからの学校は「文化の伝達」という目的意識を超えて、もっと大胆に生徒にとって楽しくかつ面白い要素を、様々な場面に取り入れる努力をするべきではないだろうか。教師はま

ず教科担当者として、担当科目の授業内容に楽しい要素をいかに導入するかを真剣に模索しなければならない。それは一つの「戦略（ストラテジー）」でもある。国語教育は今後、戦略としての要素をはっきりと前面に出して、生徒たちがいかに楽しくかつ価値あることばの活動をさせるかという点を追求するべきである。

「戦略」ということは、字義からすれば「戦争」の「策略」ということで、ネガティブなニュアンスを伴う。それをポジティブな方向に転換させながら、国語教育の新しいコンセプトとしてとらえ直すことを提案したい。本稿では中学生および高校生を対象とした国語の授業において、「いかに表現させるか」という課題に対応した表現指導の戦略についての考察を試みる。

現行（平成元年版）の学習指導要領では、表現の重視という方向性が示されているが、この方向は「言語の教育」としての立場が明確にされるようになってから、学習指導要領が改訂されるたびに強調されてきた。今回（平成一〇年度）の改訂でも、表現重視の方向は継続される。しかしながら、学習指導要領の理想とは裏腹に、中等教育特に高等学校の現場では、表現指導が活性化しているとは言い難い状況にある。新しい学習指導要領で選択必修となるにもかかわらず、「国語表現」の開講率が低迷しているという事実が、表現指導の現状を物語っている。

このことは、上級学校への進学という受験制度の問題と深く関連する。すなわち多くの高等学校の現場では、大学入試に対応するために文章の読解に関する指導を中心に据えている。表現指導も、受験に関係する「小論文」の指導が中心になってしまっている。

る。それに加えて、提出物の処理に多くの時間を費やすという理由から、授業以外の業務に忙殺される教師にとって、表現指導の充実が苛酷な課題とも言える。

中学生や高校生が文章を書くことができないとか、話し方を知らないという声をよく聞くが、本来彼らは表現することが好きなのはだ。ただ自分の感情の表現がうまくできないだけである。彼らの内にある表現意欲を目覚めさせ、適切な課題を手引きとして与え、表現のための具体的な場面を設定すれば、必ず生き生きとしたことばで表現する。ここで、表現には次の二つの要素があることを確認しておきたい。

#### 1 自己を表現するという要素

#### 2 他者とのコミュニケーションのための表現という要素

自分自身の感情を内部に閉じ込めたままにしておく、生徒たちは感情のコントロールができずに「キレる」ことになる。例えば「ウソ、エーッ、ムカッ、カワイイ」などの断片的な感情表現のことばから脱却して、自己を表現することばを身に付けさせることは、重要な課題にはかならない。それは他者とのコミュニケーションの問題にもつながる。携帯電話での饒舌なことばの応酬は、仲間うちの単なる連帯感の確認にすぎない。その段階を超えて、本来のコミュニケーションを目指さなければならない。生徒たちの自己表現の要求を満たすことによる達成感と、他者とのコミュニケーションを開くことによる充足感、精神的な安定にもつながる。これらの二つの方向にそれぞれ配慮することが、表現指導の前提となる。

## 二 戦略への階梯——目標・教材・指導法

表現の授業を構築するに際して、まず第一に目標とするべきは次のような事項である。

- 1 表現に対する興味・関心の喚起。
- 2 表現意欲の喚起。

この二点は相互に密接に関連する。そして表現活動のための前提になる要素として、きわめて重要なものである。表現指導の戦略という観点からすれば、まさにこれらの点に最も配慮しなければならない。端的に言えば、「いかに表現させるか」ということである。この点は、田中宏幸氏が詳細に考察した「インベンション指導」の領域に深く関わる。田中氏は次のように述べる。

「書くに値する内容」を発見させ、「書く意欲」を喚起する指導が「インベンション指導」である。私はこれまでの実践研究を踏まえて、この「インベンション指導」を具体化していくことで、コンポジション指導の行きづまりを打開する<sup>①</sup>ことが可能になるのではないかという仮説を持つようになった。

氏は国語教育史と自身の高等学校における表現指導の分析を通して「インベンション指導」の重要性を明らかにしたうえで、この仮説を検証した。本稿で言う表現指導の戦略は、コンポジションの指導以前に、インベンション指導においてまず試みられるべきである。

表現指導の目標として、さらに次のような事項を考えておきた

い。

- 3 表現のための場の設定。

- 4 生徒を円滑に表現の活動へと導く手引きの工夫。

すなわち、単に表現理論を教え込むだけではなく、必ず生徒たちが実際に表現する場所を授業の中に設定する必要がある。表現指導は、活動を伴うことによつて成立する。いかに効果的な表現活動の場を設定するかが、指導者側の工夫にかかっている。さらに無理なく表現活動へといざなうことができるような、適切な「手引き」の工夫も必要不可欠なことである。そして表現活動を通して達成されるものとして、次のような目標が立ち現れる。

- 5 表現することの楽しさ・充実感の体得。

ひとは生きている限り、必ず何らかの表現行動を取る。表現することは、生きることと同義でもある。この表現の原点とも言える特色を踏まえて、表現の楽しく充実した要素を指導に生かすようにしたい。

以上の五点の目標にそれぞれ配慮した指導を展開することが、戦略の基本である。

目標に続いて、表現のための教材に関して検討する。読解の領域と比較すると、表現指導のための教材の開拓はあまり積極的に実施されない。教科書においても、読み教材のように「安定教材」として多くの現場で共通して用いられるようなものはない。

わたくしは教材のパラダイム転換を試み、学校外の「サブカルチャー」を学校の「メインカルチャー」とをつなげる工夫をして、実際の国語科の学習活動に導入する試みを続けている。<sup>②</sup> 具体的に

は、これまで学校が積極的に取り入れることがなかった漫画、音楽、絵画、アニメーション、CM、映像、テレビゲームその他のメディアに関わるものの教材化である。これらのメディアは生徒たちから圧倒的な支持を得ているにもかかわらず、学校教育とりわけ授業という場所では冷遇され続けてきた。それを教材として取り入れることは、国語教育の「戦略」として、単なる指導の「工夫」の域を超えた授業改革の試みとなる。決して生徒たちに迎合するわけではない。最大の目標は、学習に対する生徒たちの興味・関心の喚起という点にある。この教材の戦略は、特に表現指導の領域において効力を発揮する。

指導法についてわたくし自身の実践では、原則としてすべての授業で毎時間、「研究の手引き」と「授業レポート」および「研究資料」と称するプリントを準備して、それに即した展開を工夫している。すでに長期間にわたってこの方法によって授業を組織しているが、毎回担当者側の負担相応の教育効果を確認することができる。「研究の手引き」には、その授業の目標、学習活動、評価の観点、課題、次回の予定などを整理する。「研究の手引き」によって、生徒たちが授業の目標や課題を随時確認し、体系的な学習活動が可能となる。また「授業レポート」は、生徒が授業の展開に即して記入をして、授業終了時に提出する。「授業レポート」で個々の生徒の状況を可能な限り把握し、常に効果的な授業内容を模索することになっている。また「研究資料」には授業に関連した参考資料を載せて配布する。

表現指導の目標の第三点として掲げた「表現のための場の設

定」という事項に関連させれば、「授業レポート」はまさに「場」として機能する。毎回提出となる緊張感は、生徒たちの意識を表現することに向かわせる。また、書くことによって考えをまとめるという練習もできる。さらに個々の生徒の学習活動を評価する際にも「授業レポート」は効力を発揮する。そこには、生徒の自己評価と、グループ学習時の相互評価の要素も含めてある。そして担当者による評価も、個人、グループ、クラスの各レベルにおいて、様々な形で取り入れることにする。「授業レポート」に収録される生徒たちのナマの声に耳を傾けながら、授業を進めるように心がけてきた。あくまでも一つの実践例ではあるが、このような「研究の手引き」「授業レポート」「研究資料」を用いた指導によって、指導内容の徹底および充実を図ることができる。表現指導の面においても、積極的な導入を試みたいところである。

### 三 表現課題の戦略

前の節で表現指導の目標、教材、指導法に関してそれぞれ言及したが、本節では授業内容に即して具体的な戦略に関する考察を進めることにしたい。表現の授業を組織するためには、まず第一に具体的な活動のための課題を提示することが必要となる。ただし、単に「何か話したり書いたりしてみよう」という漠然とした課題で、生徒たちが自主的に表現活動を展開することはない。活動のための、的確で具体的な課題を設定する必要がある。その課題が教材との相乗作用によって、いかに効果を発揮するかが戦略の要点となる。ここでは府川源一郎氏の実践を具体例として取り

上げながら、表現指導のための課題に関して考察する<sup>(3)</sup>。

教材との関連からすれば、課題にはまず次のような条件が求められることになる。

1 教材の中に、具体的な表現の課題が含まれていること。

表現指導の場合、まずは教材が表現活動のきっかけとなるように配慮する。特に教材を提示するとき第一に留意すべきは、教材の中に具体的な課題が含まれているという点である。

府川氏の実践では、次のようなまどみちおの詩が教材化されている。

( )

手製の

おりに

はいつている

府川氏はこの詩を板書して、詩の題名について考えさせた。様々な考え方の交流を経て、作者(まどみちお)の題名「シマウマ」を示すまでの過程において、生徒たちは多様な学習をする。この実践において、まどみちおの詩は教材ではあるが、同時にタイトルが空欄になっていることから、表現のための課題が教材の中に自然に組み込まれている。しかも見立てという表現技法について考え、創作活動へと展開できる意味で、きわめて有効な教材である。わたくしはこの府川氏の実践に学んで、「シマウマ」にさらに新たな教材を関連させた授業を展開する。見立てというレトリックに関する理解をより確かなものにするのが目的である。例えば佐藤雅彦の次のような作品は適切な教材となる。

( )

拳銃を持った男がいた。

そこへさらに拳銃を持った男が帰ってきた。<sup>(4)</sup>

ちなみにこの空欄には、「交番」という題名が相当する。その他、様々な見立ての詩を教材化することができる。

2 課題が、生徒の興味・関心を喚起するものであること。

「シマウマ」や「交番」のように、何よりも生徒たちから強い関心を集めるような教材を発掘しなければならない。このことは、前の節で話題にした表現指導の目標と関連する。課題自体に生徒たちが興味・関心を持つことは、表現意欲の喚起のために不可欠な要素である。

3 課題で何をすればよいかということが、生徒に直ちに理解できること。

ここで例とした府川氏の実践では、題名になったことばを連想して答えるという具体的な課題があつて、生徒は直ちに書いたり発表したりする表現の活動に入ることができる。このように、生徒自身が課題の内容を的確に理解し、円滑に取り組めるように配慮したいところである。

4 課題が、生徒が無理なく取り組むことができる内容であること。

この点もまた、これまでに掲げた条件と密接に関連する。面白いかれども手数がかかってなかなか課題が終わらないというのは、効果的な表現指導を推進することはできない。生徒たちが手軽に取り組むことができる課題を工夫するべきである。

先に表現指導の目標として、生徒を円滑に表現活動へと導く手引きの工夫という点を掲げたが、それは換言すれば適切な課題の設定ということである。本節では指導の戦略となる要素としての課題に着目して、具体的な事例に即してまとめてみた。

#### 四 授業における戦略①——アニメーションの教材化

続いて授業における表現指導の実際について考えてみたい。前の節で言及したように、わたくしは生徒たちに特に親しまれているサブカルチャーを積極的に教材化している。それは、漫画、音楽、絵画、アニメーション、CM、映像、テレビゲームその他のメディアに関わるものだが、特に表現の領域で活用することができる。以下に示すのは、アニメーション、音楽、テレビゲームを教材とした授業の概要だが、生徒たちに「いかに表現させるか」という課題に対応するための戦略として提案したいと思う。これらはすべてわたくし自身が勤務校（早稲田実業学校）の中学校および高等学校の現場で実践したもので、第二節で言及した「研究の手引き」「授業レポート」「研究資料」をそれぞれの授業用に作成し、配布したうえで授業を展開している。

まず初めに中学一年生を対象としたアニメーションを教材とした授業を紹介する。具体的な教材として選ぶのは宮崎駿のアニメーション「魔女の宅急便」および「耳をすませば」である。これらの「宮崎アニメ」は、多くの中学生に親しまれており、実際に鑑賞したという生徒も多い。生徒たちにきわめて身近な教材ということで、彼らの興味・関心を十分に喚起することができる。こ

こで紹介する授業は、わずか一時間の配当時間で実践できるものであり、投げ込み的に手軽に扱えるものである。次に平成一〇年度に実践した授業の展開の概要を示す。

1 宮崎駿のアニメ「魔女の宅急便」の一部（主人公「キキ」がホウキに乗って空から初めてコリコの町を訪れる場面）を鑑賞する。映像を見ながら、思い浮かべたことばを自由にメモしておく。

アニメの映像を見ながら生徒たちが授業レポートに書いたことばは、例えば「海」「空」「町」のような映像に出てくることばが多いが、その他「自由」「旅立ち」「明るさ」「夢と希望」などが挙げられた。

2 そのメモを参照しながら、短い詩を創作する。「魔女の宅急便」のイメージを踏まえて、自由に創作する。

まず何人かの生徒に、どのようなことばをメモしたかを発表させる。メモしたことばが少なかった生徒は、友人の発表を聞いて適宜補足する。その後でメモしたことばを参照しながら、ことばをつなげて意味のある文にする。

3 「魔女の宅急便」の挿入歌をBGMとして流しつつ、創作した詩を朗読してクラス全員に紹介する。

生徒たちの間を回りながら授業レポートを見ると、彼らの思考過程を掌握することができる。授業レポートに詩の形式で書くことができた生徒を数名指名して、教室の前に出て発表させる。

4 発表された詩をめぐって、自由に話し合いをする。

詩の朗読を聞いた生徒を指名して、感想を発表させる。各自

の感想は、それぞれ授業レポートにまとめさせる。

5 アニメ「耳をすませば」の中のあるシーン（主人公の「月島雫」が自分の創作した物語の中で、猫の「バロン男爵」と空を飛ぶ場面）の音楽を聴いて情景を連想し、連想したイメージをことばで自由に表現する。

ここから次の課題に移る。今度はまず音楽を聞いて、そこから連想するイメージをことばで表現させるという課題である。この課題でも、授業レポートにまとめた生徒を指名して、どのようなことばで表現したかを発表させる。生徒たちの多くが、空を飛ぶというイメージを連想していた。

6 実際のアニメのシーンを鑑賞して、曲から連想したシーンとの差異を各自検証し、感想を話し合う。

最初は音楽を聞いただけでイメージを連想したわけだが、今度は映像もセットにして、最初連想したイメージと実際の映像とを比較することになる。授業レポートには、映像を見て感じたことをメモさせる。

この授業では、特に映像および音楽から喚起されるイメージを、ことばで表現するという活動に主眼を置いている。このイメージをことばで表現するという活動は、浜本純逸氏が「言語化能力」と称した能力の育成につながると考えたい。浜本氏はソシユールの「ランガージュ」という用語に「言語化能力」という訳語を当てた上で、次のように述べている。

これからの国語科教育は、言語体系・言語生活・言語文化を生み出していく根底にある言語化能力に働きかけ、その能

力を活性化し、より弾力化していくことを目標とすべきであるというところになろう。<sup>(5)</sup>

この「目標」を達成させるために必要な活動として、氏は「絵画・写真・テレビ・ビデオなどの映像を言葉化する表現活動をさせること」を挙げる。ここに紹介した授業は、この浜本氏の指摘を受けたものになっている。イメージをことばで表現するという活動は、言語化能力の育成のみならず、いかに表現させるかという戦略として考えることができる。事実この授業において、生徒たちは授業レポートに書いたり、その内容を話したりする表現活動を積極的に取り組んでいた。彼らの様子を見る限り、戦略は成功したことになる。

「言語化能力」に関わる活動として、もう一つアニメーションを用いた音声表現の授業を掲げておきたい。教材とするのはレイモンド・ブリッグズの「スノーマン」である。このアニメーションにはせりふがなく、映像と音楽のみでストーリーが進行する。そこで一度映像を鑑賞したうえで、このアニメの映像にことばを付けるという学習活動を展開する。ナレーション形式、登場人物の会話形式、その他生徒たちはいくつかの形式を工夫して、映像にふさわしいことばを話す。何回か練習すると一種の「アフレコ」になる。この授業では、映像にことばを付けることに加えて、生徒たちが実際に声を出すという活動が重要となる。この授業も、一時間という配当時間で扱うことができる。

なお授業における評価の主な観点として、生徒たちが実際にいかに表現したかという要素を考えるようにしたい。すなわち、授

業レポートにどのようなまとめ、それを授業中にどのように発表したかという点の評価に配慮する。表現されたものの内容に関する評価は、その次の段階となる。

## 五 授業における戦略②——音楽の教材化

アニメーションに続いて音楽を教材とした表現指導の実践例を紹介する。わたくしは高校三年生を対象とした平成九年度の「国語表現」の授業で、以下のような実践を展開した。この「国語表現」の授業は大学への進学が内定した生徒を対象としたもので、配当した時間は一時間である。

教材として中島みゆき作詞作曲の「パラダイス・カフェ」（アルバム『パラダイス・カフェ』に収録）、参考資料として西岡文彦の「ワークシヨップ⑥・店を編集する」<sup>(6)</sup>を用いることにする。授業の概要は次のようなものである。

1 参考資料「店を編集する」を参照して、「店」をデザインする方法を理解する。

資料には、一つのコンセプトを決めたうえで、そのコンセプトに即した店舗のデザインを考えるというワークシヨップが紹介されている。資料を参照して、店のデザインという課題に対するイメージを持つことができる。

2 「癒し」の場所としての「パラダイス・カフェ」という「店」を、次のような段階を追って想像しながら、ことばによって表現する。

① それは、どんな場所にあるか？

② 店の外観、および内装はどうなっているか？

③ 店の中の雰囲気はどうか？

④ 代表的なものとして、どのようなメニューがあるか？

「パラダイス・カフェ」ということばから、生徒たちはそれぞれの店のイメージの連想を始める。特に①から④へと段階を追うことで、次第に連想を深めることができる。それぞれ授業レポートにまとめるわけだが、途中適宜発表によって他の生徒のイメージを確認できるように配慮した。

3 中島みゆきの「パラダイス・カフェ」の歌詞と曲を鑑賞して、その曲の中の「パラダイス・カフェ」の情景を想像する。中島みゆきの店と自分で想像した店とイメージの比較を試みる。

研究資料として、中島みゆきの「パラダイス・カフェ」の歌詞を掲げ、あわせてテープで曲も紹介する。

4 歌詞の中の表現の一部をブランクにして、その中に自分でイメージした「パラダイス・カフェ」の情景を当てはめてみる。

中島みゆきの「パラダイス・カフェ」のサビに相当する箇所には、次のようなリフレインがある。

ここはパラダイス・カフェ 夜明けまで 色とりどりの客が  
みんなパラダイス・カフェ テーブルの 向こうに見る甘い夢  
ここはパラダイス・カフェ 夜明けまで 悩みのない客が  
みんなパラダイス・カフェ テーブルの 向こうに見る甘い夢  
この箇所の一部を空欄にして、次のようなフレーズを示す。



ここはバラダイス・カフェ ( )  
みんなバラダイス・カフェ ( )  
ここはバラダイス・カフェ ( )  
みんなバラダイス・カフェ ( )  
この空欄に、自分のデザインした「バラダイス・カフェ」のイメージを短くリズムミカルなことを入れることによって表現させる。

5 創作した詩を中島みゆきの曲に合わせて歌ってみる。  
「バラダイス・カフェ」の曲では、最後にこの箇所の演奏のみが繰り返して流れる。それにあわせて歌ってみるようには働きかける。この授業では、一人ひとりの生徒の想像力を必要とする。想像したイメージをことばで表現し、具体的な形を与えていく。その過程は高校生にとって楽しく充実した作業であり、精神の「癒し」につながるということもあって、この課題は歓迎された。後半の課題は五音七音のリズムミカルな形式の中に、想像したイメージをはめ込む作業、さらに声に出して歌うという身体的な活動になる。「いかに表現させるか」という課題に応えるための戦略の一つとして、このような音楽を用いた授業を工夫することができる。

#### 六 授業における戦略③——テレビゲームの教材化

続いてテレビゲームを教材化した授業について紹介したい。対象学年としては中学生、高校生それぞれに適用する内容が考えられるが、ここではわたくしの中学一年生に対する実践について言及する。

わたくしが用いたテレビゲームの教材は、「サウンドノベル」と称するゲームソフトである。「サウンドノベル」というのは、小説を読むようにゲームを進めることができるので、国語の授業への導入を工夫しやすい。実際のゲームでは、小説同様に文字情報を中心となる。小説のページをめくるように、コントロールでページをめくりながらストーリーを読み進めていく。背景にはその小説に関わる映像が現れ、効果音やBGMも入っている。

そして「サウンドノベル」のゲーム性は、「分岐」と称するストーリーの分かれ目に集約されている。すなわち、小説が終始一つのストーリーの流れを読み進めるのに対して、サウンドノベルではストーリーの分岐が随所に設けられており、読む（プレイする）側の興味・関心によって自由にストーリーを選択することができる。あるストーリーを選択すると、そのストーリーに続くストーリーを読み進めることになり、別の選択肢を選んだ場合は全く異なるストーリーが展開することになる。

授業では、このサウンドノベルの「分岐」について紹介するために、実際のテレビゲームの映像を教材として用いる。教材として選択したゲームソフトは我孫子武丸原作の「ミステリー」「かまいたちの夜」を初め代表的なサウンドノベルで、さらに我孫子の書いた「初級サウンドノベル創作講座」を参考資料として準備した<sup>7)</sup>。授業の概要は以下のようなものである。

1 サウンドノベルのテレビゲーム・ソフト（「かまいたちの夜」「街」「リアルサウンド」）の一部を紹介して、具体的なイメージを持たせる。

あらかじめテレビゲームの映像を編集して、サウンドノベルの特色が見られるようにしておく。授業では簡単な解説を加えながら、映像を紹介していく。

2 サウンドノベルの最も重要な特色としての「分岐」の存在と意味について理解する。テレビゲームの映像の中で、編集によって実際の分岐を出し、具体的に理解させるように工夫する。

3 我孫子武丸の「サウンドノベル創作講座」を参照して、サウンドノベルにおける「分岐」の作り方および「分岐」を入れる場所などについて理解する。

この「講座」の中で我孫子武丸は、分岐の作り方および分岐を入れるべき箇所に関して簡単な解説をしている。その箇所を読んで、我孫子の解説を通して分岐に関する理解を深めることにする。

4 授業ですでに学習した小説を一編選ぶ。グループに分かれて、その小説の中に、「分岐」を設定するとしたらどこが最もふさわしいかを検討する。

わたくしはこの方法による実践を二回試みているが、最初の平成七年度の中学一年生では三省堂版の教科書から別役実の「空中ブランコ乗りのキキ」を、平成一〇年度の中学一年生では教育出版版の教科書から宮沢賢治の「オツベルと象」を選択して扱った。あらかじめこれらの小説を読み教材として扱ってから、授業に入る。作品に対する理解が、この授業の前提でもある。なおわたしの場合、中学一年生の国語の授業を複数の教員で担当し、表現と理解の各分野に別れて別個の担当者が扱うというカリキュラ

ムにおいて、表現の分野の担当であったため、すでに理解分野の担当者が扱った教材を選択した。なお分岐を作成する箇所に関しては、作品の中で範囲を限定した。例えば「オツベルと象」では、白象が初めてオツベルの小屋を訪れた場面から、適切な箇所を探すようにした。

5 クラスで検討した箇所を中心として、グループの中で自由に「分岐」を作成する箇所を探して、「選択肢」を作る。

この段階から、グループ学習の形態とする。グループは四人から五人の規模で編成する。各グループごとに、分岐を作る箇所をまず探す。その箇所で作ることになったら、グループのメンバーがそれぞれ選択肢を作成する。選択肢は原作にない方向で考えることにする。

6 それをグループの中で回覧して、選択肢に続く新たなストーリーを作成する。

授業レポートをグループの中で回覧して、仲間の作成した選択肢の中から一つを選択して、それに続くストーリーを作成する。そのうえでさらに次の分岐を設定し、選択肢を作成する。こうしてメンバーの中で一巡するまで、多様なストーリーの創作を続ける。

7 最終的にどのようなストーリー展開になったか、発表会を開いて鑑賞する。

グループで特に興味深いストーリーを一編選んで、そのストーリーを朗読によって発表する。

8 ブックメイキングという作業を課して、自分自身の作った

オリジナルなストーリーを、装丁を工夫してそれぞれ簡単な本にまとめる。

授業で創作したストーリーを参考として、自分自身によって自由にストーリーを創作し、それを簡単な装丁によって本にする。後日完成した本の展示会を開催して、広く様々な生徒たちにストーリーを読んでもらう。

この授業は理解と表現の領域を関連させるものであるが、テレビゲームの要素を入れると、生徒たちは楽しみながら表現に取り組む。すでに学習した文学教材を用いて、同種の授業を展開することができる。

これまで紹介した二種類の授業が、主として自己表現のためのことばに関わるものであったのに対して、この授業ではグループ学習という形態の中に、他者とのコミュニケーションを開くという要素が自ずと組み込まれる。グループの中で生き生きとしたことばが交流することによって、新たなコミュニケーションの可能性が開かれる。さらに一斉授業のみに依存するという授業形態を改善して、個人およびグループ単位の学習を効果的に組み込むことができる。クラス全員を対象とした一斉授業からの解放のための手立てとして、グループ学習の形態を見直す必要がある。

## 七 総括と課題——より効果的な戦略を求めて

本稿では特に中学と高校の表現指導に関して、効果的な授業を成立させるためのいくつかの戦略を提言としてまとめてみた。表現指導の前提として、「いかに表現させるか」という課題はきわ

めて重要なものである。

ここで紹介した授業では、中学生および高校生が関心を寄せる分野の素材を教材化したわけだが、すべてに共通するのは表現に対する生徒の興味・関心の喚起という要素であった。この点が「いかに表現させるか」という課題に対する最大の戦略となる。生徒たちが楽しく取り組むことができるということが、中学・高校現場でのこれからの授業を支える最も重要な側面になるであろう。

表現指導では、理論よりも実践を重視し、具体的な活動の場を授業の中に多く設置する必要がある。本稿で言及した戦略とは、基本的には表現活動へと導くための手立てである。生徒たちの活動によって国語学習が成立し、学習を通して学力の育成を図ることができ。まずは学習のための入り口へと、生徒たちをいざなわなければならない。

今回取り上げた事項はすべて、「いかに表現させるか」という問題意識に関わるものである。ただし、これは表現指導のほんの入り口にすぎない。次の段階では、よりきめ細かい指導の戦略が求められることになる。さらに先へ進むと、当然のことながら評価の問題、学力の問題が待ち構えている。年間指導計画の中で、どの程度表現を扱うかということも、十分に検討しなければならぬ。授業の成果を厳密に分析しながら、より効果的な実践を追求する姿勢こそが必要になってくる。

本稿の提言を基盤として、さらに新しい戦略を模索したい。それと同時に、先学のこれまでの優れた実践の成果を分析して有効な戦略を帰納的に引き出すことも、今後の重要な課題である。自

らの授業を常に厳しくとらえ直しながら、国語教育の戦略について、これからも多様な観点からの検討を続けるつもりである。

注

- (1) 田中宏幸『発見を導く表現指導』（右文書院、一九九八・五、引用は同書「緒言 問題のありか」（四ページ）による。
- (2) 町田守弘『授業を創る——「挑発」する国語教育』（三省堂、一九九五・二）の中では、子どもたちに関心のある分野に関わる教材を「境界線上の教材」としたうえで、それを用いた具体的な実践を紹介した。
- (3) 府川源一郎『「国語」教育の可能性』（教育出版、一九九五・六）の「いざさか長めのまえがき」による。
- (4) 佐藤雅彦『超・短編集 クリック』（講談社、一九九八・三）による。
- (5) 浜本純逸『国語科教育論』（溪水社、一九九六・八、引用は同書「第三章 国語科で育てる学力」（三三―三三ページ）による。
- (6) 西岡文彦編『編集の学校』（別冊 宝島・二三四）一九九一・六 所収。
- (7) 『かまいたちの夜公式ファンブック』（株式会社チュンソフト、一九九五・二）所収。

（早稲田実業学校）